

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

新政和クラブの谷口でございます。

それぞれ会派の中でいろんな研修をして、市政にどう生かすかということ論じ合ってきました。その中の幾つかを取り上げて、きょうは質問をしたいと思います。

先日、雨の中でございましたけれども、景観を考えるシンポジウム、神社のほうに参りました。最初、雨が降るもんですから、私は文化会館であるんだと思い込んで行きましたところ、多くの市民の方が文化会館にいらっしやいまして、いや、雨の中だけでもインパクトがあるあそこで、淀姫神社でやるということでございましたので、また武雄市北方町を迂回いたしましたして参りました。しかし、本当に雨の中でございましたけれども、あれはすばらしいシンポジウムだったと思いますし、その中でいろんなパネリスト、あるいは発言者の方々がおっしゃったことの中で、景観というものの考え方が、単に景観は山とか海とか、そういうものを眺める、そして、すばらしいな、きれいだなということだけじゃなくて、もっと身近に足元にも景観がある。それどころじゃない、もっと、例えば道行く方々がにこやかに明るく過ごしていらっしやる状況も、見事なそのまちの景観なんだと。これは、東洋館の江口さんのお嬢さんが発言をされた、要するに市民としての景観に対する考え方をお聞きしまして、市長の解説と相まって非常に心温まるいい会だったと思います。

ただ1つだけ会が、話が進んでまいりますけれども、内容はいいんですけれども、景観がなぜがばい景観でなきゃいかんということが、私ちょっと気になりました。その点を含めまして質問をしていきたいと思います。

もう1つは、自然、環境、文化、教育、道路、観光、福祉、あるいは音とか光とか、そういうにおいまで、これはもう景観をいわゆる支える大きな大事な要素なんだということを感じてあったわけでございますが、その点について、本当にすばらしい武雄だということに対する市民の満ち足りた笑顔、その笑顔そのものもすばらしいまちづくりであり景観だということを改めて認識をしたわけでございますけれども、そういう点について、今後景観の条例、あるいは武雄市がすばらしいそういうところであるようなやり方を進めていく政策の中で幾つかの問題点を私なりに感じたことをお示しし、考えをお聞きしたいと思います。

きょうの質問はそのほかに、実は市政における課題と選択ということで、観光ということと文化ということについてしたいと思います。

このことについては、例えば私は本当に極端な言い方ですけども、60年か140年かというテーマをすきとはっきり分けて質問をしたいと思うんですが、60年というのはいわゆる一ノ瀬泰造さんが亡くなって34年と、いわゆる没後と言わんで生誕60年と、非常に恭しい表現でございますけれども、もう1つは羽州戦争、要するに戊辰戦争から来年140年になりますが、それについて私はけさ早く山内町に行ってまいりまして、今議長の地元でありますけ

れども、山内のいわゆる地域の方々は戊辰の役に対する思い入れは非常に強い。そして、今140年の歴史の中で嘗々として、嘗々としてじゃなくて、本当に真摯に戊辰の役のことを思い出しながら、とうといふるさとのために命を落としたの方々に対するいろんなものを感じると同時に、それが1つの大きなまちおこしの中の大きな比重を占めているんだということを私は資料をたくさん貸していただきました。後で御披露しながら質問をしたいと思いますけれども、そういうことで、本当に新しい武雄市が山内と武雄と北方と一緒にあって新市をつくろうとしたときに、戊辰戦争、戊辰の役のそういう企画というものがいかに大きな比重を占めるかなということも感じてまいったわけでございますので、そのことについても話をしていただきたいと思います。

次に、私はもう1つ行政の主導とか、いわゆる本当に新しいまちおこしのためには単に行政が主導する、あるいは呼びかけるだけではなくて、民間が今までコツコツとやってきたことが大事にされながら、あるいはもっと輪を広げていけるようなことが必要ではないかと思っています。

そういうことについて、果たして行政主導が適切かどうか。それが行政主導と言えるかどうかわかりませんが、いろいろ関係する者の一人として、少年の船と、それから韓国に今行っていますけれども、中国に行くいわゆる、何ですかね、武雄市少年遣唐使ですかね。そういう旅行会社の企画とどういうものを選択をしていくかという問題の中で感じたことを申し上げて、市長の考え方をお聞きしたいと思います。

それからもう1つは、いわゆる教育再生法に基づきまして、本当に今非常に大きな問題でございますいじめの問題、あるいは親が子を殺す、あるいは親殺し、そしてまたお年寄りに対する、ああいう飽くなき本当に卑劣な行動でお年寄りを死傷するようないろんな社会問題が起こっておりますけれども、そういう問題について、いわゆる教育再生会議が取り上げた問題について、新しい教育長に教育問題と武雄市との問題についてお尋ねをしたいと思います。

それからもう1点は、農業の振興で先ほど山口議員の質問がありましたけれども、地球温暖化の問題が武雄市の農業にどういう影響を及ぼしているか。それを数字を上げてお尋ねをしたいと思います。

そういったようなもろもろの問題について十分資料が必要でございますので、席に戻って質問を続けたいと思います。よろしく願いいたします。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）（続）

先ほどここで農業問題が先にありましたので、農業問題を先に取り上げたいと思います。順序が非常に前後しますけれども、1つの流れとして申し上げたいと思います。

橘に参りました。本当に先般の去年の水害のときですか、本当に地元の山崎議員、あるいは鳥越前議員等が本当にいち早く駆け走り回って、本当に地域の方々が水の問題で御苦労していただいていることを、いろんな対応について図ってもらったということをお聞きいたしまして、ああ頑張っているなという感じを持ってきたわけですが、きょう橘の問題はどういうことかということ、ちょうどそこで話をしておりましたところに、農業委員をされたある方がお見えになりまして、そして、温暖化の問題で田植えの時期が早くなったり遅くなったり、なかなか農家も地球温暖化の問題については影響を受けているという話をお聞きいたしました。

そこでお聞きしたのが、橘の一番の産物とおかしいですけども、お米の問題にしますと、本当に一番おいしいのは橘町のモチ米だという話を聞いて、橘のモチ米はおいしいそうですねと、私もおもちにしていただきましたけれども、とってもおいしかったという話をいたしましたところ、橘のその農業の篤農家の方は、農業委員もされた方ですけども、実はモチ米の栽培が地球温暖化の影響で1週間おくと、遅く植えつけをせにゃいかんと。なぜかということ、取り入れのときにまだ秋深まってもまだ暖かいから、本当に品質を保全するためにはどうしても遅くなるというふうな話をされましたが、そういったような、例えば植えつけとか、そういうところで、どういう形で農業に影響がっているのか、本当にお聞かせをいただきたいと思います。まず、その点でお願いします。

議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

前田営業部長〔登壇〕

お答えしたいと思います。

地球温暖化によりまず影響でございますけれども、まず九州農政局のほうの資料を見ますと、平均気温が現在よりも上がるということになりますと、田んぼ、あるいはその水稲、そこから水分が蒸発をしていくということで、現在よりも約20%ぐらい蒸発をして水田の水不足に陥るということで、枯れていくという状況になっていくということでございまして、まずは苗の作付の時期が変わっていくと、当然ですね。それから、品質の低下とか、あるいは高温の障害、それから害虫の被害、そこら辺が増加をしていくということでございます。

これらについては水稲のことですが、次に、野菜につきましても、野菜についてはどっちかといえば涼しいところではあるわけですが、気温が高くなると生産性が当然低くなるということで、特にハウスについては、現在冬でも暖房をしているわけですが、冬には暖房が要らないという利点がありますが、そういう影響が出てくるということでございます。

それから、お茶につきましても、温度が上がりますと休眠期が短くなって一番茶の成育数量、品質が悪化をしていくということ。それから、温州ミカンについては、一番適した気温

が年平均でいきますと15度から18度ということで、適地の分布が、全国の分布が変わって、その地域が北上していくということが言われております。

そういうことで、全体としては温暖化に武雄市としては今後品種の改良、あるいは栽培の技術、そこら辺を確立をしていくということで、現在進めておりますレモングラス、そこら辺の栽培、そこら辺も考えていく必要があるんじゃないかというふうに考えております。

以上でございます。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

今、農作物、米、野菜等いろいろ影響があるということはお聞きしましたし、今県内でもタマネギあたりが暴落して、とにかく収穫するのが嫌になるぐらいで放置してあるとか、あるいはまたいろんなことを聞くわけでございますけれども、そういう中で、例えばモチ米の話をしましたけれども、本当にモチ米をつくるには橘が一番最高の場所だと、味が違うという話を一生懸命橘の方はしていらっしゃいました。むべなるかなと思うわけですが、問題は、結局、橘が1週間遅く田植えをすると。ところが同じモチ米の苗を武雄は1週間早くやるということを知ったわけですよ。ところが、橘と武雄とは同じ市ですから、しかも例えば二俣とか、何ですか、そういう地域が武雄の川良と道を隔てて実はあるわけですよ。だから、5メートルか10メートルぐらい隔てて1週間作付が違うということはどういう影響があるのか、私もそこらは非常に不勉強でわかりませんが、どういう形でそういうふうになるのか。武雄市は全体としては一緒にしないのかとか、そういうふうな気もしたわけですが、そこら辺について、いい機会ですから教えていただきたいと思っております。

議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

前田営業部長〔登壇〕

私も詳しいことはよくわかりませんが、それじゃ、収穫をした後の共乾ですね、乾燥施設がございますので、それぞれの共乾施設の地区で、例えば植えつけの時期とか、あるいは収穫の時期が決まっておりますので、そこら辺で植えつけが違いますと、いろいろ問題点とかそういう影響が出てくるんじゃないかというふうに考えております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

私はいよいよ単刀直入に、植えつける日にちが同じ土地で、道を隔てて片方は1週間後、片方は1週間前となると品質にばらつきがあるんじゃないかという気がしたんですが、考えてみると、橘地区という、そういういわゆる何というんですか、商標というか、いわゆる有

名なブランドを持った地域のは、そこだけで共同乾燥作業をして品質の一定化を図るという意味での作付が地区によって違うということですね。本当にまさに目からうろこという感じでございます。

そういうことで、もう1点、じゃあ関連して、前段それをなぜお聞きしたかということですね。今武雄は、いわゆる神戸牛とか松阪牛とかということはありませんけれども、武雄のいわゆる畜産というのは物すごく大きな比重を占めているということをお聞きしましたけれども、畜産の今の武雄市の現状はどういうものですか、その点について。

議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

前田営業部長〔登壇〕

お答えしたいと思います。

19年度当初に出された資料ですが、現在、武雄、北方、山内含めまして和牛の生産者の戸数が150戸ございます。それから、そこで肥育をされている牛が1,111頭ございます。それから、肥育牛戸数が19戸で2,358頭と、それから乳牛の生産戸数が6戸で、飼育されているのが223頭ということ。

それから豚ですが、肉豚が8戸で630頭、それから子豚が2戸で40頭、トータルしますと牛、豚合わせますと生産している戸数が180戸で、頭数としては4,362頭と、そういうふうな数字になっているところでございます。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

わかりました。私が質問していると農業の問題ですから、ちょっとあれっという顔をなさった方がいらっしゃるかもしれませんが、私も市の農業委員会の会長もやらせてもらった経験がございまして、いわゆる農業問題については、農は国の基本ですから、やっぱり関心を持たざるを得ません。

私なりに勉強させてもらって、この間、私は大町に行きました。大町で、いわゆる県の佐賀みどりの畜産共進会がありました。やっぱり議会もそういう農家の方々とかいろいろなことに、それはたまたま畜産でしたけれども、ほかのいろんなことにあってもできるだけ積極的に出て行って、そういう現場を見せていただいて、そしてそういう人たちと色々な仕事ぶり、あるいは努力というものをやっぱり私たちも拝見させていただいて、本当にそういう自然の中に影響されたいという気持ちで、私も本当に門外漢ではございましたけれども、大町の佐賀みどり畜産共進会に参ったわけです。

その中で、本当に、武雄もたくさんいましたけれども、太良とか鹿島とか、向こうのほうで随分牛の出頭頭数等も多かったわけです。その中で、私1つだけ紹介したいんですけど

も、19年2月15日、寒いときでした。でも、参りましたところ、何と武雄の方がグランプリをとられたわけですよ。これはもう十分若木の方は地元ですから御存じだと思いますけれども、肉牛子牛部門のグランドチャンピオンに輝かれましたのが、若木の川内ですかね、原口正之さんですか、非常に熱心な畜産の努力をされているようでございます。

私初めて知ったのは、雄は漢字で牛の名前を書くそうですね。私は雌も漢字かと思いましたが、雌は平仮名ということで、なるほどどういうことがあるのかということ、いわゆる親牛と子牛の関係とか、いろいろルールがあってそういうふうになっているということもお聞きしました。しかし、ちなみに、例えば武内の古川さんとか、この間もグランプリでしたし、堀富男さんですか、も本当に平成14年には第8回の全国和牛能力共進会で、いわゆる肥育牛とか、そういう部門ですばらしい賞をいただいている。そういう方々の努力が武雄の畜産、武雄牛というですか、佐賀牛というものの市場価値をどんどんどんどん上げていっているということをお聞きしたわけです。なるほどなということ、私は感銘深くお聞きいたしました。

畜産振興についても、武雄市はいろんな意味で努力をしてあると思いますけれども、そういう、どういう形で畜産なり、そういう農業振興に、例えば市の農林課はかかわりを持っているか、そこらについて考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

前田営業部長〔登壇〕

畜産などの振興につきましては、以前から市のほうも畜産農家の支援等をやっております。以前は子牛とか、そういう導入するときに補助金制度もあったようですが、今はそういう制度は別の形でやっておるようですけれども、どっちにしても畜産の振興協議会、そこら辺を通じて今後とも振興を図っていきたいというふうに考えております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

畜産のほかに、例えば産業部門では本当に親子二代、三代、おじいちゃんからわたって、例えば印章、県の彫刻部門とか密刻の部門で、そういうふうに技能グランプリで優勝された、グランプリの小林さんの御一族も武雄にいらっしゃるし、いろんな分野であります。

私は、平成14年の4月に、私は武内の堀さんが受賞されたとき、武雄にはいろんな目ききもいらっしゃるなという話をお聞きしました。それは、第8回の全国和牛能力共進会というのがあって、そこに都道府県から出品された牛、あるいはそういうものの目ききをする能力、いわゆる審美眼の能力の検定試験に、どういうことかわかりませんが、例えば牛の美人とか美人じゃないとがわかるかわかりませんが、それからよく成育したとかというものの、

農業問題の大先生が議会にいらっしゃいますのでちょっとあれでしょうけど、失礼ですけども、こういう話を聞いたとき、私は、そして女性の部で、実は鈴山輝美さんという方、この橋の方が、岐阜での大会で見事第1位になられたと。要するに、自分で飼育するだけでなく、それを見る目というのが、日本でも指折りのそういう方も地域にいらっしゃるということをお聞きして、なるほどなど。武雄の畜産は奥が深いなということを私なりに感じたわけですが、そういう問題と一緒に、今回の質問の中で予防注射の問題を通告に出しました。そしたら、予防注射と出しとったもんですから、健康増進課から、何かはしかの予防注射というようなことで感じて受けとめられたんでしょうけれども、実は牛のいわゆる妊娠した牛が流産をしないようにする予防注射があるんだそうですね。そういう問題の中で、ちょっといろいろと検討すべき問題があったということで、私もそういう知る機会を得たもんですからお聞きしましたところ、それについてはやっぱりすぐ市の農林課が対応をされて、そして十分納得はされているということでございましたので、あえてその点の問題についてはこの程度にいたしますけれども、問題は、農業政策の中で、さっき言いましたのは、実はモチ米が道を隔てて橋と武雄と違うということを申し上げたところの伏線になるのが、実はこういうふうに注射にしても、北方町は自由に注射をしていいと。注射をする人のいわゆる飼育する農家の自主性に任せてあると。ところが、武雄市は強制といわんでも、そういう形の中でしなきゃいかんと。選択制がなかったと、余地が、ということで、今回は選択制に変わったということでございますので、それでいいんですけど、私があえて申し上げたのは、そういうふうないわゆる農家の方々が納得して、そして本当に農業のことについて専門的な農林商工課、あるいは農協を信じて頑張っていらっしゃる姿が一番農家の育成、あるいは振興のためにいいことじゃないかということをお聞きしたもんですから、あえてこれを質問をしたわけでございます。

それについて、一応経過については了解しておりますけれども、もし説明が必要であればしていただきたいと思っております。

議長（杉原豊喜君）

前田営業部長

前田営業部長〔登壇〕

先ほどの予防接種の関係でございますが、これについては、先ほどありましたように流産の防止のために予防接種を行ってきております。これについては武雄市の家畜防疫協会ですが、そこが事業主体でやっておるようでございます。そういうことで、今後につきましては、防疫協会のほうで畜産農家の意向を尊重して任意で実施をしていこうということで、希望があったところについて実施をしていくという方向でやるということで決定をしているようでございます。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

では、質問を景観に戻します。

景観の問題についてお尋ねを重ねていただきますけれども、景観というものに対する考え方を私はこの間のシンポジウムの中で本当につぶさにお聞きしまして、そしてまた、シンポジウムのことをよく聞き取れない部分が、雨でありましたので、テープにさせていただいてもう2回、3回と聞き直しました。本当に感動する場面がありましたし、また、そのときにまちおこしの講師、外国のお嬢さんですね、すばらしい、何でもとにかく意欲を持ってやるんだと。どんどんやっていくと、みんなある程度完成した段階でほかの方々が本当に、早うから言うてもらうぎ私たちも加勢すつとやったとかと言われたとか、何ともユーモアにあふれて本当に頑張る姿を見ました。その中で、景観の問題等も山口裕子議員ですか、いわゆる発言をされまして、いろんな問題について一緒にそういうシンポジウムに自分たちも参加をして、そういうふうな取り組みをされたことに感銘を受けました。

そういうことでございますけれども、その中で、実は景観について、私もいつも思うんですけれども、例えば桜山はすばらしいと、ただすばらしい桜山をただすばらしいと感じるために大事なものは何かというと、ふるさとに対する誇り、思い、そういうのが一体となったときにすばらしい景観になるんだという、そういう発言もあったような気がいたしましたけれども、景観についてどういう感想をお持ちなのか、市長はもちろんその中のいわゆるトータル的なアドバイス、あるいは意見も言ってらっしゃいましたので、この機会にもう一度お聞きをしたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

私の景観に対する思いは、そこにあるものだというふうに考えております。それは歴史的なもの、あるいは文化的なもの、新しくてもそこに価値あるもの、それが総体として私は景観だというふうに考えております。

平成20年、来年の4月からの景観条例につきましては、まず目に見えるものをいかにそこにちゃんと価値があるか、すなわちそれで阻害しているものについては引き算をして、何といたうんですかね、武雄の景観というのを考えていきたいというふうに思っております。

議員がおっしゃる気持ちであったり、においというのは多分次の段階だと思います。まず、目に見えるものをきちんとクリアして、そこにみんなでもたまたま景観ということをやっていくと。行政の役割というのは、その道筋をつけるものだというふうに考えております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

私はいろんな今市長がおっしゃったように、十分よくわかります。あそこで、シンポジウムでいろいろ発言があった、私は何度も出向いて行って聞かにゃ自分の気が済みませんので、いわゆる現地に行って聞くというのが私の考え方、立場でございますので、一応私も忙しい時間が、私は忙しい時間じゃないですよ、相手の方の忙しい時間でしたけれども、時間を2時間、10分でいいからと言いながら、つい2時間も景観について話を聞かせていただきました、考えを。まちづくりに一生懸命でした、東洋館の江口さんですね、お嬢さんに、あそこまで行って出向いて聞きました。本当に今市長がおっしゃったように、目に見えるものを大事にすると同時に、そういうものをどう受けとめるか、あるいはまちづくりにどう生かすか、そういったものを人の笑顔、本当に自分のまちは散歩していくと観光客の方が見られても、例えば温泉の楼門の前で立ちどまって、湯上がりのおじいちゃん、おばあちゃんが楽しそうに話していらっしゃる、そういう楽しそうにしていらっしゃる姿そのものが景観なんだと。トータル的な景観というとならえ方だということをお聞きしまして、感動したわけでございます。そういう記録をずっとノートにとってまいりました。

そういうことと同時に、実は私もあそこを通りながら感じたんですが、それはそれですばらしいですけども、武雄温泉の、今工事があっています。下水道工事があっていまして、その下水道の工事を本当に、今何と申しますか、あそこは、温泉通りに長崎街道、前の議会でも取り上げましたけれども、長崎街道のいわゆる陶板があります、絵の陶板がありますが、陶板がほとんどアスファルトで真っ黒く半分、それから3分の1とか塗ってあるんですよ。これはどういうことなんだろうかと思って、私は気になっておりました。

ところが、陶板そのものが実は下水道工事ですから、それはもうどういうことですかと聞きましたら、仮工事だということで、それはもう仮工事やむを得ません、これは仮工事です。ところが、仮工事のときに陶板をどこに保管してあるのかということを知ったわけですよ。その点はどうなんですか、もう一度お答えいただけますか。

議長（杉原豊喜君）

松尾まちづくり部長

松尾まちづくり部長〔登壇〕

お答えいたします。

議員おっしゃる陶板、あれにつきましては、きれいに目地から切って、目地ごとにちゃんと切って外そうと努力したわけですけど、どうしても外しきらなかったわけです。それで、最初に再生しかないと、新しくするしかないとということで、きれいに外しきらなかった分につきましては処分というか、廃棄しております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

今部長おっしゃったように、なかなか、本来はあれはきれいに外してどこかにおいて、その次にまたはめてもらうと、本修復のときというのは、私はそれを期待していましたし、今、いわゆる例えば道路を切り開かなくても、地面の底でもトンネルを掘ってでもできるような時代に、本当に、例えば陶板のこれくらいの厚さのものを切り取ることがそれは全部じゃないですよ、とにかくここら一帯大きい広いようなものじゃなくて、1枚、2枚の陶板だけを外せんような技術しかないんでしょうかね、業者の人に。そういう気がしたんですよ。

というのは、実は非常に残念なことを思い出しました。復旧するということで、例えば文化会館の横に、内川という川があり、もう御存じのとおりですね。内川があって、その内川は、実は武雄神社に行く道、あるいは長崎に行く道、ああいうきれいな道ができる前までは、主要な道だったんですよ。そこに、あれがあったわけですよ。眼鏡橋があったんですよ、石づくりの。あれが歴史的に非常に貴重なものだということで、市役所が承知をしてもらって、その眼鏡橋には、石の一つ一つに番号をつけて、そして保存しようということで、今昭和区の今の場所的に言えば、篠田皮膚科の手前のほうの公園のところに保管してあった。それで、またもう1つは、武雄神社の参道の外宮、下の宮のところに保管をしてあったというふうなことで、いつできるか思ったところ、とうとうできないままにお聞きしたところ、いつの間にかいわゆる解体したものがなくなると。武雄で、前に高速道ができるときに、東川登にそういう石橋があったものを、やっぱり皆さん歴史的なものはきちんと残そうということで、いわゆる高速道路公団に交渉をしまして、今のサービスエリアですかね、あそこの中に、ちゃんと保管をしてあるということで、いまだにそういうものを眺めることができるわけですよ。

きょう、山内に行きましたところ、山内の議長さんのところの下にあったあの石橋も、結局あそこに石橋のアーチの形は残して、いわゆる黒髪の里のあそこにきちんとしてありました。もっと完全に整備すればもっといいんでしょうけど、それでもそういう歴史の遺跡でも少しは残そうという形で努力してもらっているんですけども、例えば、私も今高松塚古墳の絵を、いわゆる何というんですかね、美人画というんですか、そういうものを復元することで国も一生懸命していますけれども、高松塚古墳の飛鳥美人でも比較するというわけにはいかんですけれども、少なくとも県が億近くの金を投じてつくり上げてもらった温泉通りのああいうものを、何でできんだったか。

そしたら、それだけを修復するといっても、ほかのはもう少し壊れかかっています。色も変わっています。そうすると、そこだけ新しくつくったって、それをつくるほうがよっぽどお金が高くかかるんじゃないかという気がするんですよ。そういう点については、じゃあ、県とか地元にはどういふふうな話をされた上で工事になったんですか、それをお聞きしたいと思います。責めているわけじゃないですよ、事実関係だけ確認したいと思います。

議長（杉原豊喜君）

松尾まちづくり部長

松尾まちづくり部長〔登壇〕

お答えいたします。

温泉通りの工事に入る前に、あそこは将来的にどうするんだと。今、鉄平石が張ってある、あるいはれんがブロックが張ってあるという仕上げになっていますけど、将来どうしましょうかということで、本町の温泉通り振興会ですかね、長谷さんが会長をされているわけですが、そこにどうしましょうという問いかけをしました。そしてもう1つは、本町の区にもどうしましょうと、どういうふうな仕上げにしましょうかということで問いかけをしています。

それで、何しろ地元からまず出してくださいと。その地元から将来的にどういうふうな仕上げにしてくださいということを出してもらって、それでもって担当課としては県と協議する、あるいは市の財政とも協議するというところで、将来どうしますという、最終的な結論を出しますというところで、地元の人たちに嬉野、塩田、それから大町、この3地区に視察というか、現場を見に行ってもらって、私もそういうときに一緒に行きましたけど、どういう仕上げ方にしましょうかという問いかけをして、今のところ、地元からはあの鉄平石じゃない形にしてくれという意見が出ています。それで、まだ最終的にどうするということまで結論になっていません。今そういう状況です。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

結論が出るときは、もう壊してしまっ捨ててしまっあたら何も復元、もし復元せろとなったときは、やり直しということになるわけですね。そして地元は、それじゃ温泉通りはそうであっても、今度は宮野町はどうなんですかね。宮野町も通るわけでしょう。それから、今度は八並になってきます。あそこまで実は長崎街道の陶板の絵は続いているわけですよ。この間、3月の定例会のときも、私、雨の中でしたけれども、もう一度それを見直そうと思ってずっと回ったことを議会でお話したこともございますけれども、私が言うのは、壊すこと自体が悪いということじゃなくて、何だか、鉄平石というのは、あれはほかの石畳のことですからね。例えば、熱海が、実は武雄市も観光部門に本当にいわゆる経験とか、あるいはアイデアを持った方々をいわゆる職員として知的な導入をされて、それで新しい観光の体制をつくらうという。熱海だってそうでした、熱海もそういう観光アドバイザーを、しゅんの人に来てもらってやっていると。そのときに、一番最初、熱海でも問題になったのは何かというと、例えば鉄平石みたいな石畳があるんですよ。確かに格好いいわけですよ。ところが、女性の観光客には人気が悪いです、あれは。なぜかということ、実際は女性の方も何もかばんを提げてばかりじゃないんですね。小さい車のついたのをちょっと引っ張って歩

かれる。そのとき、がたがたがた音がするわけです、あれが。そうすると、どうも何となくみんなが振り向いて見るようで、本当に観光客には評判が悪いわけですよ。

だから、例えば本町通りがそういうことを意識して将来は変えてもらうということで承知されたかどうか、それは知りません。私はわかりませんが、問題は、その鉄平石はそういう格好で方法があるかわかりませんが、私は陶板を話しているわけですよ、陶板をですね。

そういうことがあったとすれば、本当に陶板は県がこれは観光のために絶対いいんだということで、あれは井本さんのときでしたかね、やってもらったんでしょうけども、そういうふうな形の中でみんなうれしい思いをしたんですけれども、現実問題としては非常に使い勝手が悪い。やぶさめの馬だって、あそこタイルですから、馬が走れんで昔の行事ができんようになっている。そういう意味では私も何か方法はないかなと思ったりしたんですけれども、問題はいざあれを壊すときになって、技術的にそれはできんけんが、それを廃棄してしまっただかということになると、本当に伝統的なものを守りたいときに、そういうものは本当に技術上の検討ができないだろうか。

もちろん、担当課がいきなり壊してしまえとってされたとは思っていません。あなたのことですから、随分慎重に地域とも話をしてあると思います。それを云々しているじゃないわけですよ。そういうとらえ方をどうするかということをお聞きしているわけですよ。

その点、例えば、タイルがあれもひとつの大きな観光の、足元観光の目玉であったわけですから、市長、その点はどう思いますか。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

私も陶板は見ましたけれども、基本的にあれを道路に敷いた時点で、その文化的とか保存的側面はそこは考えないほうがいいんじゃないかというふうに思いました。本当に保存するんであれば、あれを道路に敷き詰めるのではなくて、恐らく壁面のほうに置くべきだったというふうに考えております。

そういう意味で、私も足元という意味では、議員とは認識は多分同じだと思います。私は、いろんなシンポジウム等で申し上げているとおり、武雄が一番活気があったのは観光的に活気があるのは昭和30年代だったと思うんです。そのときの景観を見たときに、土だったんですね。ですので、今土をまくというのは技術的にちょっと無理かもしれませんが、土系のアスファルトで、しかも廃材チップを入れて歩きやすく、しかも循環型社会に呼応したものを私は、市長としてはそういったものを敷き詰めて、長く使えるようなアスファルト整備をすべきだというふうに考えております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

現実問題とすれば、工事が進んでいるし、あるいは下水道工事だってやっぱり急がにやいかん問題ですかね、現実問題はそう。ですから、今市長のお考えを聞いて、私も納得いたしました。

というのは、本来は、やっぱり私も壁画という表現はあえて、高松塚の壁画と比較するなんておこがましいわけですがけれども、しかし、あれでも一生懸命長崎街道の歴史をたどった、一生懸命焼き物を陶芸家の方々がつくられたものですから、ああいうのを足で踏んで回るよりも、むしろずっと町並みにしていくとか、そういうやり方のほうがよかったような気がしますけれども、現実問題でああいう形になっておりますので、今後、ただ、あれをそれじゃアスファルトで仮舗装をしているけれども、今後本舗装にして、じゃあ、あれ半分残った分を半分だけ残すといったって、それは全体で一つの絵ですからね、半分残したって、言わないでも、高松塚古墳の首から上は残すとか、そういう感じしかならんわけですよ、現実には。ですから、そこらは少しでも前向きに、観光地らしい道の再生を考えてください。

もうこのことはこれで結構ですから、どうぞひとつ御努力をお願いしたいと思います。

次に移らせていただきます。

実は、これから先がちよっと私も質問するほうも頭が痛いわけですが、御答弁をお願いしたいと思いますけれども、私は今度例の戊辰戦争のときに、私もほかの議員と一緒に昭和61年に秋田に参りました。ここにいらっしゃる方も五、六名いらっしゃると思います。そのときに、秋田の方々も本当に真心秋田といいますが、そういうふうなもので物すごく感激をして帰ってまいりました。

どういうことかというと、戊辰戦争のときに武雄から、特に山内からが一番最初に出兵をしてもらっているわけですが、山内の方々が戊辰戦争で本当にとつと命をなくしていらっしゃいます。武雄も本当に18名かの方が命を落とされた。しかし、本当に現在、これは靖国事案にするとまた国際問題になるといけませんけれども、靖国神社に祭ってあるのは戊辰の役で国づくりをしたときのつと犠牲者が祭ってあるわけですよ。そういうことをこの間私は遺族会の慰霊祭のときに申し上げたわけですが、そのことは別途置きましても、戊辰戦争というもののいわゆるここに資料がありますけれども、これは130年のときの資料ですが、来年が140年ということで、いわゆる去年、「列車が武雄に来た」ということで、2年前のいわゆる企画展のときに、次はもう戊辰戦争だということで、みんなそう思ってたわけですよ。それで、予算もついて準備が進んでいるということで期待をしておったところ、やっぱり諸般の事情でされんようになったようで、今お断りをしているということをお聞きしたわけですよ。何でかなと思って心配になっておりました。

現実には、そのこと等はここに置いて、戊辰戦争についてやはりどういう理解をして、やっ

ぱり武雄市は本当に戊辰戦争で秋田まで、みんな武雄から、佐賀藩の自治領が武雄ですから、しかも武雄でできた大砲を持って、そして奥州列藩で攻められている佐竹藩を守るために、本当に命がけで武雄から来てやってもらった。佐賀から来てやってもらったということで、秋田の方々、佐竹藩の方々には本当に佐賀藩が、あるいは武雄から来てもらわなければ秋田というところはもう埋没して本当に焼け野原になり、同時に本当にいわば県としての存在感がないようになってきたらという思いから、本当に命の恩人、あるいはふるさとの恩人は武雄なんだとそういうことで、真心秋田ということで、武雄の方々、戦死した方々をそれは丁寧に祭って、そして本当に朝晩の線香を絶やさず、そしてしかも馬渡さんのお墓はいわゆる住民の方々の新しい集落の中に発見されてあるんですけれども、そのお墓に、実際は地域の自治会の方々が月のかわるごとにお花を生け、それから灯明を上げて大事に大事に祭ってもらった、そういう歴史が実はもう130年、来年が140年目になろうとしているということでございます。

そういうことで、ぜひそういうことが武雄の文化、いろんな活動の1つの拠点になっておるんだというふうな大きなことから考えましたときに、戊辰戦争のことを顕彰することはとっても大事だということで市民も期待しとったし、また歴史研究会の方々、きょう私は山内から資料をお借りしてきましたけれども、これは松尾家に伝わる古文書です。ごらんいただきたい、大事なものですからですけど、これは明治2年の春のことですけども、ここに、これ本当余り粗末にされんものですから丁寧に少しずつ、ここに書いてありますが、御条目と書いてありまして、この中にあるのは、本当に山内の方々が秋田に行って、最初は京都まで行かれています。それから、京都から船に乗って下関を通過して、そして秋田に行き上陸して、日本海を回って行ってあるわけですから、そういう状況の中でやっぴりやるわけですよ。まず、大阪に行って、それから京都でにしきの御旗をもらって、山内町の方も武雄の方もですけども、そういう状況の中で来てあるわけですよ。そして、そういう中で、一番まさに落城寸前だった佐竹藩を守ったのが佐賀藩だということで、奥州列藩の中で非常に孤独な戦いをしてありました。お墓もちゃんと祭ってありますし、私の地域の方、樋口千兵衛さんという方ですが、樋口、昔の眼科ですかね、ありますね。そのときに軍医として参加されていますけれども、そういうお墓もちゃんとあります。それで、象潟にあります。象潟というのは皆さん御存じでしょうが、場所がまた全国最北端のところですからね、そこうちの議会も一緒に行ってお参りをしましたよ。本当ですよ。そして、真心に感激して帰ってきました。

そういう思い出を持った、そういうふうな戊辰の役の記念祭というのをやらにやいかんということで、その準備をしてきたわけですよ。これに書いてあります。本当に山内の方々が戦いの中で、もう食べるものもないわけですよ、途中の農家に寄ってお米を分けてもらって、それを食べ、泥水をすすりながら戦っていたということを、実はお話をしているわ

けです。そういう記録がここにあります。後で皆さんにも見ていただきたいと思いますけれども、これを一つ一つ紹介するには時間が足りませんので、あえてここにありますが、本当に私は朝行って、これをちょっと見せてもらって感激して帰ってまいりました。その中のいろんな記録がありますが、とにかく「関東御出陣お供日記」という明治2年のことを書いてございます。そういったものを後でいろいろとお話をしたいと思いましたが、まずは、戊辰戦争についてどういうふうに戊辰の役と、それを武雄市がどうかかわりを持ってきたかについて、私は私なりに読ませてもらっておりますけれども、本当にどうしてお考えか、そこらについてお聞きしたいと思います。これは教育委員会ですか、市長部局ですか。

議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

浦郷教育長〔登壇〕

武雄市の教育方針の5番目に、多彩な文化の振興と伝統文化の継承という項目を上げております。

学術的に価値の高い多くの遺跡、歴史上重要な資料、あるいは文化財の保護、整備活用と開発、埋蔵文化財との調整、歴史的に本当に意義ある資料、あるいは遺跡、そして今お話にありました思いがつながるような資料等も多々あるわけでありまして、そういう面で、財政的な裏づけとか、あるいは事業を行う上でのいろんな条件等がありますけれども、調整を図りつつ考えていく。

その中に、この戊辰戦争に関しても思いを込めて受けとめて、そして現在からこれからの文化の考え方、その中に生かしていくという考えであります。

〔30番「市長なり副市長は答弁が何かないですか、関心……」〕

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

御指名でございますので答弁をさせていただきたいと思います。

私は基本的に歴史の1ページというのは、そういう企画展とかそういう問題ではなくて、教育の、さっき教育長が答弁したとおり、教育の中で先人たち、偉人がこういうふうに活動してきたんだと、そういったことを教育の中にきちんと取り入れるべき問題だというふうに思っております。

私は基本的にそういったのを本なり写真、あるいは映像かもしれませんが、それを次世代に引き継ぐ、あるいは我々の社会教育かもしれませんが、そういったことで継承をしていくということが大事だというふうに考えております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

私があえてここで一般質問の中で取り上げたのは理由があります。というのは、なぜやらないのか、やるのかという問題じゃないわけですよ。本当にいよいよ、あと来年、もう何カ月かすると140年になろうとするとき、本当に歴史の中で戊辰戦争、戊辰の役が果たした役割、同時にそれが非常に武雄市が大きなかかわりを持ってやったこと。武雄市というのは山内を含めたことですよ、一緒ですから。一緒にやったんですよ。本当に山内がむしろ武雄の原点ですからね。そういう意味では、今度新しい合併した最初の企画のものとして、わかってない人に話しているわけですから、そういうことを皆さんにお話をしているわけですが、問題は、結局、これはもう経過を申し上げます、十分時間がありますから。

昭和61年に、秋田の区画整理事業の中で、武雄から行った馬渡栄助さんという人のお墓が、8名の方のいわゆる佐賀藩士のお墓が見つかったわけですよ。そこで、61年5月にはもう既に新聞に遺族捜しの公告が新聞に出た、記事が。そしたら、もしかしたら私のところの御先祖様じゃなからうかということいろいろありまして、川良の人たち一緒になって、馬渡栄助は川良ですから、そういう方々に戊辰戦争役佐賀藩士慰霊秋田委員会をつくってもらって、そういう、いわば遺族捜しがとり行われたという状況がこの中に記録にあります。そして、62年に、それで、61年にそういうことがございましたので、武雄の議会も本当にそういう歴史的なものを自分たちの目で確認しようということで行ったんですよ。今度、やっぱり武雄の議会から、何ですか、雄武町にたくさん行かれるようですけども、余り変わらんことですよ。実際は、雄武町との交流の中で本当に何かを見出していこうということですから、私たちも当然そういう中でみんな歴史をたどって行ったというんです。そのときに、だれに会ったかの話はしませんけれども、その馬渡栄助のお墓が発見された後、とにかく秋田の方々が、それじゃこの機会にもう一度私たちの感謝の気持ちを武雄に、佐賀県にしたいということいろいろんなイベントをしてもらいました。

それから、昭和63年に武雄市でも戊辰戦争、62年からは資料展をやって、そして、本当に武雄に実は感謝の気持ちとして持ってこられたのが秋田の竿灯でした。門外不出と言われる秋田の竿灯を持ってきて、そして物すごい武雄にこんなに人がいたんだろうかというぐらいに、とにかく写真も撮れないんですよ。あの竿灯を温泉通りに、本当、何と感激しました。肩もすぼめ、つま立って歩けんぐらいの状況で、本当なんですよ。信じられんぐらい人間が楼門の前から温泉通り、これは、いや、そのとき生まれていない人は笑う資格ないですよ。いや、そういうふうな気持ちで一生懸命頑張ってやってきたわけですよ、みんなが。そして、その秋田の人の真心に感謝せにゃいかんということで、今度は西川登、高瀬の荒踊りを行って、この戊辰戦争130年祭のときに秋田のシンポジウムに参加して、市長を初めみんな行ってもらって、そしてこの真心秋田に感謝する、そういう行事に参加をしていった。そ

のときも行きました。そしたら、確かにもうきれいにお墓も掃除して、子供たちまで手を合わせてくれたんですよ。武雄の子供たちもそうしてくれたらうかなと思うぐらいに、本当にすばらしい感じがしたわけです。

そういう状況の中で、戊辰戦争のことが実は着々と進んでいると思ったのが、現状はできないであると。しかも、その理由は何かという、いわゆる私はここで出てきますけれども、いわゆる生誕60年というのがやられるということですね、生誕60年、しかも、これ予算出ていますけれども、予算が私はいはれですよ、泰造君のことも、実は泰造君の行事は泰造君の行事で進めてもらっているんですよ。ですけれども、ちょっと投資対効果という表現は適切でないかわらんけれども、どっちが人が集まるといったら、私はわからんと思いますよ、やり方で。

私はもしこの戊辰の役のそういう記念祭があったとすれば、恐らく秋田からもまた竿灯を持ってきてもらっていると思いますよ。絶対にできません、それは。そういう気持ちの中での交流は今でも続いているわけですから、そういう状況の中で人を集めることができるのは、何も泰造君の問題だけじゃないわけですよ。

私、泰造好きです、泰造君。ですから、私は皆さんも多分、市長は御存じないかわらんけれども、泰造君が逮捕された、カンボジアでクメール・ルージュに捕まったというときに、市民はみんなで何とか泰造君を救い出したいということで、全部で本当に夜を徹して署名運動をしました。そして、何万かの署名を集めて、じゃあこれをどうして捕まえたクメール・ルージュに届けるかと、いわゆる相手に命ごいをするかと、助命を頼むか、釈放してもらうかということでみんなで努力したけれども、知恵を絞ってもどうしても手が届かんわけですよ。国交がない、カンボジアとは。そのときに思い出したのが、シアヌーク殿下でした。シアヌーク殿下に何とかお願いしようじゃないか、じゃあ、どこにいらっしゃるか。国交がないですから、外務省を通じてお願いしました。そしたら中国に行かれるということになりましたから、中国まで何とか行こうでも、中国行けんです、そのときはですね。ですけれども、一生懸命努力をしたということで、私は皆さんと一緒にそういう努力。ところが、それもできませんでした。それじゃ署名を何とか生かす方法はないかということで取り上げたのが、いわゆるジュネーブにある国際赤十字社だったわけですよ。国際赤十字社にそれを送りました。そして、そういう状態の中で、でもそのときには既に泰造君は処刑された後でした。その後も泰造君のいろんな行事があるときに、みんなで協力し合って、少しでもそういう思いを届けてあげたいという気持ちで努力したのが、今までの私たちのあり方です。

ところが問題はどこかという、泰造君の記念祭、記念の写真展をする。それと一緒に、それは武雄の写真展をやる、結構ですよ。しかし、それを企画展でやるのが2つできないからといって、事片方のいわゆる戊辰戦争のそういう節目のことをできないというのはおかしいと。武雄市の能力は2つか3つのイベントを一遍にできるぐらいの力はあるんですよ。職

員だって素晴らしい人ばかりですよ。市長と2人の副市長がいらっしゃいますから、3つの行事が一遍にできるじゃないですか。それぐらいの気持ちで、そういう表現は適切じゃないかわかりませんが、あしからず聞いてください。そういう気持ちでこの問題は取り上げていくべきじゃなからうかという気がしますけれども、とにかく戊辰の役に対して、地域の方々が一生懸命必死の思いで込めた気持ちというものを、どう理解してあるかをひとつお聞かせいただきたいと思います。

どなたと言いません、だれかやってください。担当は副市長じゃないんですか、それは。私はイベントは1つ2つじゃなくて、3つでもできると言いよつとよ。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

今一方で、武雄市はやり過ぎだという声が出ています。これは、いろんなドラマのロケであったり、あるいはイベントであったり、それは傾聴に値する部分があると思います。我々も限られた人的能力であります。そうであるとするならば、1つのことにきちんと専念をして丁寧なものをつくり上げていく、これが樋渡市政の根幹であります。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

市民の意見も聞いてということですから、それはもう1つのものに集中するのは根幹としていいですよ。ですけれども、本当に、じゃあ1つのものを継続して、私は思うんですよ。継続してこういう問題を進めにかいかんということは、山内のその当時の議員さんも、あるいは合併のときの委員さんだって承知をしてあることですもんね。ですから、合併協定書の中にそういう表現はないにしても、精神は生きているわけですから、それも大事にしてもらうのも市政じゃないですかね。そういう気がしますけど、それはどうですかね。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

済みません、質問の前に、合併協議会にどういったことが書いてあって、私が申し上げることはそれに反するか、それに対して明らかにしていただきたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

合併協議会の中で論議をしたのは、これは副市長がいらっしゃるからわかるですけれども、私も合併の委員でしたし、議長もそうだし。だから、それぞれの地域が守り育ててきたもの

に対しては大事にするということは、それを言外に、文章以前の問題として了解してやってきているわけですよ。それもまた、その次の質問の中で合併協定に書いてあることでしてないことがありますから言いますよ、そんなら。

いや、これは、別にそのことでどうのこうのと議論をするために私が申し上げているんじゃないんで、私が言うのは、本当にそれは泰造君のことは泰造君のことしなさいという思い入れはありますからやってもらって結構だと。2つも3つも云々ということじゃなくて、私は例えば、まだ実際、今はもう来年のことですから、お断りを全部していると思うんですよ、もう、ことしはできませんということ。しかし、来年は企画展ができなくても、140周年だと記念行事をやってでも、そういう思いをせにゃいかんわけですから、そういう取り組みを、じゃあやろうじゃないかということであれば、それで私はいいと思いますよ。そのときに、いろんな思い入れがやっぱり具体的な形で、そしたら秋田の竿灯だって、それは来年呼べるかどうかわかりませんよ。ですけれども、そういう機会にやっぱりもう一度、本当に秋田との交流、そういうものを私は泰造君との行事、あるいはほかの何とか少年遣唐使とかというのと余り変わらない。それ以上に背景の深いすばらしい行事ができるんじゃないかなろうかという気がするわけですよ。

そういうことに対して取り組みを期待して私は申し上げているわけで、何もいわゆる何とですか、2つできない、3つできないということじゃないわけですよ、能力はあるわけですから。絶対ありますよ。そしてまた、それぞれの分野で協力する方がいらっしゃいますから、市長は長く武雄にいらっしゃるんだったらおわかりですけど、武雄の力って捨てたものじゃないですよ、本当、できますよ、と思います。でも、この問題はいいです、ここで。

終わります。（発言する者あり）（「進行、進行」と呼ぶ者あり）

議長（杉原豊喜君）

30番議員、質問。

〔30番「はい、しますよ」〕

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）（続）

私がとにかく戊辰戦争のことにに関して、実はいろんな資料があります。「私の地域づくり日記」「佐賀藩戊辰戦史」、貴重な歴史的資料も用意しました。そしてまた企画展のいろんな資料も、本当に見てください。もう2年ごとの企画展をしたのを全部、私全部読ませてもらいましたよ、本当。皆さんもお読みになったと思いますよ。本当に武雄ってすごいなど、こういうことをやっていく、そういう力がみんなあるんですよ。だから、そういうのを最大限に発揮して、いろんな分野でお互いが得意な分野で努力すればいいわけですよ。ですから、そういうための1つのきっかけが戊辰戦争の記念、いわゆる資料展であるし、あるいは泰造君の写真展であろうし、いろいろなものをですね。だから私は例えば、がばいばあちゃんの

行事にしても、まず欠席することはございません。必ず出席をして、できるだけ頑張っている人に声をかけて、私たちはお役に立たなくてもそういうことについては一生懸命やろうという気持ちでおるんですよ。

ですから、問題は泰造君の行事は予算的に11,500千円ですか、それはそういうふうな形はそれで、それが高いとか安いとか私は申し上げているんじゃないんですよ。ただ、企画展の予算を、問題は結局会場の問題とかいろんな問題があるだろうと思います。ですけれども、本当に、恐らく山内の方々も、武雄の心あるの方々もそういうことについては、そういう形で、ことし企画展ができなければ、節目の来年の140年には何とかそういう形の中で秋田との交流をもう一遍やろうじゃないかというお気持ちはお持ちだろうという気がしますので、そういう問題を市民の、住民の中から提起があったときには、やっぱり市も胸を開いて取り上げて、ともにやってほしいという気持ちがいいたします。その点についてはいかがでしょう。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

私は企画と、その気持ちというのは分けて考えるべきだと思います。貴重な税金を、これ経済産業省からも多大な補助金をいただくことになるわけですけれども、いずれにしても税金を投入しなければいけないという意味では、戊辰戦争の件、あるいはT A I Z O + T A K E O展もそうだと思います。

それについては、私は企画の最高責任者としてやはり失敗はできない。そう考えたときに、T A I Z O展か戊辰戦争か、中でも大議論をしました。節目である意味では、私はT A I Z O展のほうが企画の最高責任者としてはこちらのほうがより観光客、そして地域住民の方が盛り上がるんだろうという判断を下したところであります。

私は、イベントというのは基本的には民間主導が筋だというふうに考えております。これは、東京、大阪、沖縄、すべてそうであります。そういう意味で、もし本当に議員がやる、やりたいということであれば、みずから実行委員長としてさまざまな手だて、私と比較にならない歴史もネットワークもおありでありますから、そういったことで先陣切ってやられればいかがかなというふうに考えております。

もとより、行政としては補助金を交付する立場、そして観光振興を図る立場、総合的に勘案してことしは少ない資源でありますけれども、T A I Z O + T A K E O展に心血を注ぐと決意をいたしております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

うれしい言葉をいただきました。私は実行委員長になってやるだけの器でもございませんし、能力ありません。だけど、そのようにいろんなものを思い入れを持ってそういう努力をするとき、私は一兵卒になって頑張る努力はいたしますよ。そしてまた、本当の問題ですよ。でもやる気がないんじゃないですよ、やる気は十分ですよ。ですけど、私はそういうおこがましい気持ちは持っておりません。しかし、本当に今まで歴史的に努力をし、今までを積み上げてきた方々のそれはそこで評価をしながらやっていくということも、やっぱり市にとっては大切なことではなかろうかと。

特に今から合併した新しい市はコミュニティーといいですか、地域、あるいはそういうふうなボランティアの活動にしても、みんなで助け合ってやっていかにかい時代だと私は思います。

そういう中で、本当に少しでもやれる方法があれば、じゃあ財政的な問題にしてもそうですよ。企画展にしてもそういうふうな、何といいですか、基本的な予算については、じゃあ市の予算が組めなければ補助金なりなんんりの方法があればそういうアドバイスをしてもらって、こういう方法が予算上はできるかわからんけん、頑張ってみてですかということをおアドバイスしてくれるのは、やっぱり市じゃなかろうかという気がしますよ。市は、みんなが民間でそれは実行委員会をつくって、それはやられますよ。だけど、そういうものに、いわば水をやるというですか、水をかけるんじゃないくて、本当に何というか、盛り上げていく、そういう基本的な姿勢というものを私は政治に期待をしたいと思っております。

でも、戊辰戦争で余りこういうことで次元の低い論争はしたくないですから、私も本当に今でも武雄のために頑張ってもらった人、山内のために頑張ってもらった人、北方のために頑張ってもらった人、そういう先人たちの御苦労はきちんとした形で残したい。これは、イベントと、そういうものと少し違うと市長はおっしゃいましたけれども、私はこういう企画展をする中でいろんなものを教育の分野でもいろんな分野でも触発する何かがあるんじゃないかという気がいたします。

以上、きょうはこの問題はこれにいたします。

次の問題に移ります。

今、やっぱり基本的には民間がすべきだということをおっしゃいました。私は、この中で実は略称でしょうけれども、少年遣唐使の問題と少年の船の問題とをお尋ねしておきたいと思っております、残り時間が20分ほどありますので。

その中で、実は少年の船は22年です、たちました。もう第1回目の少年の船からは本当に回を重ねてきました。そこに、6月1日の新聞で、市が事務局を撤退して協会が単独か、あるいは継続かという話を読みました。少年の船の事務局としては、もともと実際はその当時、昭和、一番最初ですね、1984年にそのときに実際市制の記念祭をしたときに、そのときに30周年記念祭でしたか、そういうときに実は鹿島市も鳥栖市も多久市も、市が主催をして呼び

かけて少年の船を沖縄とかいろいろなところに派遣する事業が行われました。

ところが、そのときに武雄市にも有志が集まって、ぜひ教育委員会でやってくださいとお願いしたところが、やっぱりいろいろな諸般の事情でそういう、いわば沖縄とかそういう大きな事業について教育委員会としては予算がすぐはできないし、同時に、いわゆる何かあったときの責任が持てんというふうなこともあって、そしたら責任は私たちが持ちますよと、私たちの力でとりあえずやりますから、今後は行政も積極的に努力、協力してほしいということで、200何名かのいわゆる子供たちが全部沖縄に行ったんですよ。そのときの、本当にメンバーの中には副市長の古賀さんもいらっしゃるし、本当にみんなが実際お互いが旅費も宿泊費も何でも、これも自腹ですよ。子供たちに負担をかけれんから、そして、みんなでそういう運動を活動して、本当に子供たちによかと、これも記録があります、ここに。1回目から全部記録がありますから、そういう記録の中にあるように、よかったという思い出がいっぱい書いてあります。そして成功したわけですけども、随分苦勞もございました。

そして、そのときの初代の会長は、園田病院の園田先生、教育委員長でした。だけど、教育委員会としては、委員会としては本当にそういうことの直接的な対応はできないまま、事務局だって、文化会館の端っこを借りて独自にやってきました。そして、とにかく22年たったわけです。その間に、よそはみんな、例えば山内にしてもセバスポール、いろんなところに行かれるようになりまして、いろんなことがありました。

ところが、現実問題として、本来沖縄に続けて行きたかったけれども、教育委員会としてはその当時、国際交流ということもテーマの1つにしたいということで、その訪問先に韓国を選ばれたわけです。そして、いろんな韓国との交流が始まりました。そして、武雄市が県ができなかったことを武雄市独自で韓国との、いわゆる近くて遠い国ですけど国際交流をきちんとやってのけて、非常に評価をいただきました。そのときの努力の結果、実はその当時の市長である石井義彦さんが、本当に子供たちとの交流に日韓の友好交流に多大の貢献をされたということで、実は韓国政府から立派な賞を、勲章をいただかれたわけですよ。主催は少年の船でしたけれども、市がタッチをしてやってもらっていることですから、そういうことになりました。

そして、すべて皆さん方に、実は市民の方々から寄附をもらってやるしかない、市は予算を組んでいませんので。そういうことでやってきましたけれども、本当に私たちが22年やってきて、心の底に残る痛みが1つあるんですよ。それは、お金を出して行けるところの子供たちの応援を私たちはしているわけですよ、形としては。ところが、本当に子供たちは行きたいけども、家庭で何万かのお金が出せないところもありました。そういう子供たちをどうしてやってあげられるかと。ところが相談しますと、特定のところに出したら、あそこは何で行きんさったとか、例えば要保護、準要保護とかいろいろあるじゃないですか。修学旅行であれば、教育委員会がお金を出して何らかの形で方法がありますけれども、そういう少年

の船とか、あるいはほかのそういう民間が形としてする事業には、いろんな形の補助ができませんわけです。

そこで、いつものどの奥にとげが刺さったように、本当に行きたい子供が行けない、そういう状況の中で寄附を集めて回って、行けるとところの子供に出してやるのはいかがかという議論がいつもあったわけです。それで結局、教育委員会ですか、市のほうが応援してもらって予算を組んでもらうようになった10回目以後、いろんなことを考えて、少しでも寄附をもらうことを減らしていこうと。しかしながら、子供たちに負担はかけられませんので、旅費は、いわゆるリーダーとか、それから保健師さん、そういう方々に対するものについては市のほうのいわゆる予算を組んでもらって、それで事前の研修、これはもう物見遊山とか観光ではありませんから。旅行会社の企画じゃないんですよ、私たちが計画して旅行会社に依頼をするだけですから、そういうふうな形の中で、結局実行してまいったわけですがけれども、本当に寄附をもらわないとすれば、約800千円近く毎年予算が必要です。市が出してもらったのが800千円くらいですから、100何十万、トータルで3,000千円近くかかりますので、そういう約3分の1ぐらいの補助を、実際にリーダーの派遣費とかいうことで出してもらっています。

ところが現実問題として、今度は実は少年の船の事務局が、いわゆるもう自分たちでやりなさいということで引き揚げられました。それはそれで、もともと自分たちでやってきた行事ですから、それは原点に戻るのもいいことなんです。しかし、現実問題として、今協会は気持ちとしては本当に寄附金をみんなに募集をしてもらわないで、何とかしてその範囲でやっていこうということでございますけれども、そうすると、少年の船のリーダーについては旅費も、昔と同じように一銭も出せません。宿泊費も一銭も出せません。ところが、市が呼びかけてする遣唐使については予算を組んで、それは少年の船のもともと組んである予算なんですよ。それを、今度はいわゆる武雄少年遣唐使のほうは、こども部に移ったためにそこが使うとすれば、少年の船の今までの、少年の船を仮にことし実行するとしても、その実、リーダーなりそういう保健師さんなり、みんな人は全部ボランティアですべて自費でやってもらう。あるいは労力とか能力とか、時間でもかってお手伝いするだけじゃないんですよ。負担もしてもらわにゃいかんと。

ところが片方、そこを片方、市が主催する、呼びかけるところは旅費を出しますよと、宿泊費も弁当代も出しますよと。片方は全部自分で出さなさい。市がやる分は、こっちの水は甘いぞと、こっちの水は辛いぞと、そういう感じにリーダーの取り合い、あるいはまた子供の取り合い、教育委員会に3回申し入れしました。教育委員会も困っていらっしやいました。今まで教育委員会は学校を通じて子供たちの募集をしておりました。努力してもらいました。そして、校長会の校長先生を代表として派遣してもらいました。しかし、教育委員会に、いわゆる事故のときは迷惑かけられませんので、少年の船がすべての責任は団長なり、あるい

は協会が持つということで、本当にここにいらっしゃる大河内さんあたりもリーダー、団長としても随分努力をしてもらって、苦勞をされました。

そういう状況の中でそういう事態になったものですから、何とか、何とかつなく方法はなにかということで検討をいたして、今まだ審議を、論議をしている最中です。本当につらい思いであります。

私が言うのは、本当にこれは民間活力で最初始めたんです、確かに。しかし、今度は行政主導ということになったときに、行政のほうは予算がありますからできますけれども、じゃあ民間であなたたちやんなさいというところは、いわゆるそういう予算は何もないわけですよ。しかも、方針としては基本的には、行けない子供たち、行きたくても行けない子供たちに出してやるお金がないならば寄附をもらってまで活動はされんというのが、今の偽らざる現状であるわけですよ。

そういうふうな立場になったとき、私は少年遣唐使を持ってきた企画者が近畿日本ツーリストということも知っております。しかし、近畿日本ツーリストには最初、沖縄に行ったときは随分努力をしてもらった会社です。しかし、韓国は西鉄旅行社、それは韓国の当時の政府、いわゆる青少年連盟が韓国との交流については特定の指定をするわけですよ。ですから、そこを使わないと、もし事故があったときには責任はとれんというから、その旅行社を使ったといういろんな裏の事情がございます。そういうふうな形の中で、少年の船は最近少年の翼に変わったそうですねと言われます。何で少年の翼だろうかと思うんですよ。少年の船は飛行機で行かにかいかん、片方はですね。私はちょっと次元がずれているわけですよ、私に言わせると。船でも宇宙戦艦ヤマトは飛んでいくわけですよ。ですから、私たちはもっとおおらかに考えておるわけですが、私はそれはそれとして、今まで本当に教育委員会に随分努力してもらって御苦勞かけていますし、市のほうからも協力してもらっていますから、それは感謝すること以外はないわけですが、現実問題として、そういう取り合いになったときにどういう問題が起こるかということを考えたときに、実はいまだに頭を痛めています。

こういう事例があります。実は1つだけお願いしたいのは、じゃあ少年遣唐使を中国に派遣されたとしても、ずっと続けてもらえるかどうかという心配をしておるわけですよ。予算がなくなったら、もうことはやめましたということになるんじゃないかと。まあ、そうならんとは思いますが心配します。

事例があります。それは昭和42年、古い話ばかりとおっしゃるかもわからんけど、これ現実にまだあるわけですから。昭和42年から5年間、私たちは実は武雄の若い人たちが集まって、小さい子供たちのために役立つことはなかるかということで、子供の交通事故が発生していましたので子供を交通事故から守る運動をやりました。武雄市児童文化研究会というのがありました。市の職員の人がいっぱい入ってもらって、随分活発な努力をしました。そ

のときに、小さい鈴を買ってきてリボンに縫いつけて右の肩につけて、鈴の鳴る運動というのをやったんですよ。非常に評判になりまして、全国的に評判になりました。

ところが、あるとき保育所から電話がありました、実は鈴が届きましたと。私たちは入園式の日を持って行って、みんなボランティアのメンバーはその日仕事を休んでやるんですよ。ところが鈴が届きましたというわけです。どこからですかと、交通安全協会からというわけですね。警察から届いているわけです、鈴が。何で鈴を私たちはもうつけてあるのに、右、左鈴をつけて運動を、おかしいじゃないですかね。それで、私は交通安全協会に行ったんですよ。そしたら、いや警察が御指導いただいてということで、そのときはですよ。そしたら、警察に行っただです。あなたたちは、私たちがやっている行事をそういう形でせんで、私たちが春、入学式のほうでするから、秋の交通安全でできませんかと言ったら、決めたことは絶対進めにかいかんということで、予算も組んでますからというわけですよ。予算組んで、しかも私たちはみんなが仕事を休んで、保育所に行って、子供たち一人一人につけてやる運動をしているのに、警察は 警察とは言いませんね、交通安全協会は届けて、それでそれをつけてくれというわけですよ。両側につけるわけにかいかん。それで、保育所は困っていました。子供にどっちの鈴をつけてやるか、悩みよるわけですよ。かわいそうじゃないですか。子供をめぐって、私たちは右側につけると言います、向こうは左につけるとは言いませんけれども、私が母親と、産みの親だと、私は育ての親だと、子供を真ん中にして腕の引っ張り合いだったですよ。そのときに、手を放したのが、実は産みの親だったわけですよ。もう痛い痛い泣く子供、困り果てている子供が本当に見るに忍びないのですよ。少年の船の現状と似ています。私はそう思いました。

本当に、いやこっちを実施する場合に教育委員会にお願いしても、子供は同じですから、こっちに来い、あっちに来いって引っ張ったときに痛がるのは子供だし、父兄だし、学校現場なんですよ。それを今まで本当に協力してもらった教育委員会に、あるいは学校に負担、迷惑はかけられん。やっぱり私たちが手を放すべきじゃなかるうかと一たんは解散を決議しました。会議に諮りました。だけど、子供のために役立つことがあれば、何とかしてしたいということで、まずは存続することに話はなっただすけれども、問題は、申し上げたいのは、私たちがやめて、後は交通安全協会、警察にお願いしたところが、2年半でやめたんですよ。なぜかという、予算がなくなったからですよ。トップがかわって課長がかわって、トップがかわって予算がなくなれば、そういう行事は本当に心の底からできる行事でなければ、終わってしまうわけです。 何ですか、これは、質問ですよ。それに対して、私は絶対に市としては続けていただくつもりでそういう計画をされたかどうか、それをお尋ねします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

事業というのは、あらゆる事業、政策目的が達成するまではやることが基本であります。そういった意味で、子供遣唐使について、もし議会の同意等がとれた場合には、政策目的が達成するまではきちんと責任を持って行いたいと考えております。

議長（杉原豊喜君）

30番谷口議員

30番（谷口攝久君）〔登壇〕

そういうふうに、とにかく私は子供のためにやってもらうことはいいことですから、それがいけないと言っているわけじゃないんですよ。だから、続けてもらえれば何よりと思います。そしてまた、少年の船協会はどのような形で残るかわかりませんが、いずれにしても、いわゆるリーダーの人たち、若い連中もみんなそれぞれノウハウを持っていますから、役に立つ形で協力はしたいという気持ちは皆さんお持ちのようです。

ただ問題は、今までであった既成のことを引きずって参加するということではいけないということが、私たちの基本的な考え方です。ですから、問題は、やっぱりどうせなら、なぜ今度は少年遣唐使にすると、だから今までの少年の船は今までも御苦労だったけれども、これに今度は協力してもらえんかと、あるいは中国に訪問先を変えてもらえんかということを一言もおっしゃらずに、いきなりそういう形で事務局を引き揚げますという形は、いささか乱暴ではないかということが私は春の温泉祭りの若い人たちのあの騒ぎと、いわゆるオーバーラップして、こういう心配をしたわけでございます。

いずれにいたしましても、子供たちのために今後行政がそういう立場をとっていただければ、しかしおっしゃったのは民間は当然すべきだとおっしゃって、今度は市がいわゆる政策目的に達する、実現するまでは続けるとおっしゃるなら、その整合性を私はいかがかなという気がいたします。いずれにしても、期待をしております。

終わります。